

# 子どもたちの食環境と食教育

## —箸づかいの実態と支援学習—

井上えり子<sup>1)</sup>・森田 安奈<sup>2)</sup>

### Food Environment of Children and Food Education : Skills of Using Chopsticks for Children and Support Learnings

Eriko INOUE and Anna MORITA

抄 録：本研究の目的は、子どもの箸づかいの実態調査・分析と正しい箸づかいである伝統型への移行を支援するプログラムの開発である。鳥取県東部の幼稚園・小学校・中学校に通学する 1257 名を対象として、箸づかいの習得状況をデジタルカメラの撮影により調査した。調査期間は 2003 年 11 月と 12 月および 2004 年 12 月である。この結果、中学生段階においても伝統型は 5 人に 1 人であることが判明した。次に中学生 151 名を対象として箸に関するアンケート調査を実施し、その中から伝統型に到達しておらず箸に対する興味が低い生徒 18 名を抽出し、給食の最初の 3 分間、伝統型で食する実験を 1 ヶ月間（2004 年 11 月～12 月）実施した。その結果、18 名中 9 名が伝統型に移行し、4 名が伝統型に近づくなど大きな効果が認められた。

キーワード：箸づかい、食教育、食環境

## I はじめに

日本における箸の使用は 1300 年以上の歴史があるといわれ、箸づかいに関するマナーは長い年月をかけて生活の中で蓄積された代表的な食文化のひとつである。また、箸一膳で、はさむ動作以外につまむ、わける、運ぶ、ほぐす、混ぜる、すくう、切る、刺すなど、様々な操作を行うことができ、箸さばきは手や指の器用さの象徴でもある。しかし、現在では、箸を正しく持つことができない子どもが増え、成人についても箸が正しく持てず、上手に使えないという指摘がなされている<sup>1)</sup>。

正しい箸づかいができるようになるためには、幼児期からの食環境が重要である。VTR を用いて幼児の食事場面を分析した酒井治子によれば、幼児はスプーンを持つように箸を強く握りしめる初期段階から、いくつかの段階を経て「手指が分化し、親指が他の指と向かい合っている」正しい持ち方すなわち伝統型に達するという<sup>2)</sup>。従って、正しくない箸づかいとは、伝統型に到達するまでの過渡的な段階で留まっている状態であり、箸を正しく持つためには、い

<sup>1)</sup> 京都教育大学家政科

<sup>2)</sup> 岡山県立岡山操山高等学校

かに箸づかいを発達させるかが鍵となり、そこでは食環境が重要な役割を果たす。

子どもが箸づかいを学ぶ食環境は、主として家族、保育士、教員、友人などと一緒に食する食卓である。身近な人々の働きかけや関わりによって子どもは箸づかいを学んでゆく。ところが、近年、家庭では子どもの孤食の増加が指摘されており、箸づかいを学ぶ環境は悪化している<sup>3</sup>。また、箸づかいは料理の形態や食器の形状からも影響を受ける。最近増加しているファーストフードや市販の菓子、副菜の少ない献立では箸を使う機会は減少する。加えて、お子様ランチのように数種類の料理を大皿に盛り合わせた料理は箸では食べ難くスプーンを使用することとなり、箸づかいは上達し難い。箸づかいを学ぶ食環境は人間関係、料理、食器のいずれにおいても悪化しているといえよう。その結果として、箸を正しく持つことができない子どもが増えていると考えられるのである。

こうした子どもの食環境を改善するためには、家庭、学校、地域、メディアなどで広く食教育を展開する必要があるが、本研究では、このうち学校教育における食教育、とりわけ箸づかい関する教育に絞って検討する。まず、子どもの発達段階（幼児、小学生、中学生）ごとに箸づかいの習得状況を調査し、実態を把握した上で、次に、中学生段階において伝統型に到達していない生徒に対する支援プログラムの開発につながる実験を行いたい。

## II 研究方法

### 1 実態調査

調査対象は、表 1 に示した鳥取県東部の幼稚園 1 校、小学校 5 校、中学校 2 校の計 8 校、対象者は 1257 名である。A 幼稚園は鳥取市近郊の 5 歳児のみが登園する幼稚園である。B 小学校と C 小学校は鳥取市近郊の小規模校であり、D 小学校と E 小学校は鳥取市近郊の中規模校、F 小学校は鳥取市内にある大規模校である。G 中学校は鳥取市近郊にある中規模校、H 中学校は鳥取市内にある小規模校である。なお、調査後に調査対象学校の位置する町はすべて鳥取市と合併し現在は鳥取市となっている。

調査期間は 2003 年 11 月 10 日から 12 月 17 日までの 37 日間と、2004 年 12 月 12 日から 12 月 13 日までの 2 日間の計 39 日間である。

調査方法はデジタルカメラを用い、給食時の箸づかいを観察、記録する方法を採った。調査の際には、①対象者の正面から撮影しない、②学校給食中の自然な食事行為を撮影する、③撮影角度は肩越しに背中側から撮影する、④右手に箸を持つ対象者には左肩から、左手に箸を持つ対象者には右肩から撮影する、⑤対象者の顔が写らないように、手元のみを撮影する、⑥撮影を拒否した幼児・児童・生徒に対しては撮影しないである。

上述の①③④は箸づかいが最も鮮明に撮影でき、②は箸を持つ行為のみを撮影すると普段とは異なる持ち方になる危険性があり、最も自然な箸づかいを撮影するためである。⑤⑥は対象

表 1 調査対象

学校名		人数
小学校	A幼稚園	47
	B小学校	75
	C小学校	92
	D小学校	182
	E小学校	292
	F小学校	170
中学校	G中学校	248
	H中学校	151
計		1257

写真1 分類①伝統型



写真2 分類②伝統型になる直前の持ち方



写真3 分類③それ以前の持ち方



者のプライバシーに対する配慮である。

先述の酒井は箸づかひの発達を4段階（A～M, 13種類）に分類している<sup>4</sup>。ここではそれらの分類を参考にしつつ、下記に示した①伝統型、②伝統型になる直前の持ち方、③それ以前の持ち方の3つに分類する。3分類にしたのは分類の正確を期すためである。分類数が多くなれば、判別し難い事例が多数であることが予想されたため分類数を最小限にした。

なお、デジタルカメラの角度などで箸の持ち方が鮮明に写らなかった場合は不明とした。

分類①：伝統型。親指、人指し指、中指で上の箸をつまむようにしっかりと支えて、薬指、小指で下の箸を固定する。伝統的箸づかひは、はさむ動作以外に「つまむ」「わける」「運ぶ」「ほぐす」「混ぜる」「すくう」「切る」など、様々な操作を行うことができ、どのような食事にも対応できる。

分類②：中指の位置が違うだけの伝統型になる直前の持ち方。中指が上の箸の上の部分に位置しているので、上の箸を持ち上げることが困難になる。小さいものをつまんだり、はさんだりすることには問題はないが、箸さばきの「切る」「裂く」大きいものを「つまむ」などがしづらく、細かい作業が困難になる。

分類③：見た目、使い方とも伝統型とは全く異なる箸の持ち方。この持ち方では、箸独自の細かな機能を使いこなすことはできない。

次に、学年（園児、小学校1年生から6年生、中学校1年生から3年生）ごとに数値・割合を算出し、箸づかひの推移について分析する。

## 2 支援プログラム開発のための実験

鳥取県東部の中学校1校（H中学校、151名）に対し、箸づかひについての質問紙調査を実施する。調査内容は、①伝統型の認知、②対象者自身の箸づ

かいの認知, ③家庭における箸づかひの伝承経験の有無, ④学校における箸づかひに関する教育経験の有無, ⑤箸づかひに対する意識, ⑥箸文化の伝承意欲である。

調査結果と対象者の実際の箸づかひをクロス集計し, どのような傾向があるかを考察する。調査時期は2004年11月である。

なお, 本報告では紙面の制約上, これらの内容のうち主として①から④について報告する。

次に, 調査結果から箸文化に無関心で伝統型ではない生徒を各学年6名(計18名)無作為に抽出し, 伝統型の箸づかひを指導する。そして, 給食において伝統型で食事をとる実験を行い, デジタルカメラで撮影・記録, 変容を分析する。

実験時間は, 対象者の食事に支障が出ない程度の長さである食べはじめの3分間に設定した。実験期間は2004年11月25日から12月24日までの30日間である。実験後に質問紙調査を行い, どのような変化が現れたかを考察する。

### Ⅲ 箸づかひについての実態調査

#### 1 発達段階と箸づかひ

表2と図1は幼稚園調査の結果を示したものである。A幼稚園の5歳児では伝統型の箸づかひを習得している幼児は6%であり, 伝統型になる直前の箸づかひは28%, それ以外は66%であった。5歳児の段階では伝統型は僅かであり, 9割以上が伝統型の箸づかひには到達していないことが分かる。

表3と図2は小学生調査の結果である。小学校1年生では幼稚園調査とほぼ同じ状態であるが, 学年が進行するにつれ, 徐々に伝統型が増加し6年生では16%が伝統型に移行している。加えて, 伝統型になる直前の箸づかひも増加し, 1年生の21%から6年生の55%まで大幅に増加し, それ以外の箸づかひは1年生の66%から28%に減少している。但し, 全体では全児童のうち伝統型は1割に留まっている。

表2 幼稚園調査

内容	五歳児 (n=47)
分類①	6%
分類②	28%
分類③	66%
不明	0%

表3 小学生調査

内容	1年 (n=112)	2年 (n=140)	3年 (n=129)	4年 (n=135)	5年 (n=163)	6年 (n=133)	計 (n=812)
分類①	3%	8%	10%	11%	13%	16%	10%
分類②	21%	32%	39%	44%	52%	55%	41%
分類③	66%	58%	48%	43%	31%	28%	45%
不明	10%	2%	3%	2%	4%	1%	4%

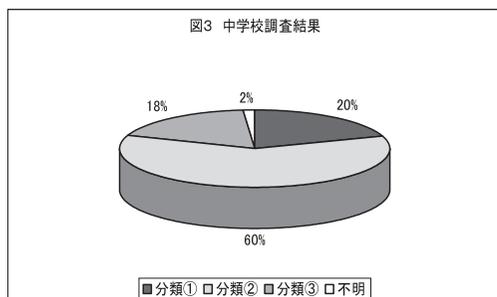
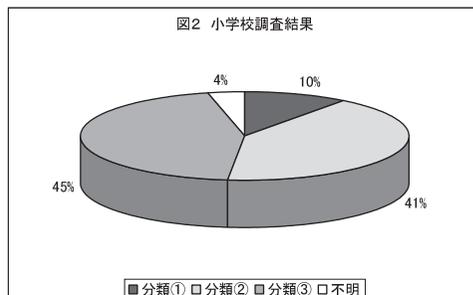
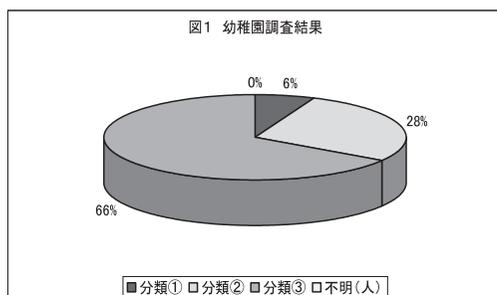
表4 中学生調査

内容	1年 (n=112)	2年 (n=138)	3年 (n=134)	計 (n=393)
分類①	15%	20%	23%	20%
分類②	57%	62%	63%	60%
分類③	26%	17%	12%	18%
不明	2%	1%	2%	2%

表4と図3は中学生調査の結果である。中学校1年生では小学校6年生とほぼ変わらない値であるが, 中学校2年生で伝統型は2割になり, 中学校3年生では23%の生徒が伝統型に移行している。加えて, 伝統型になる直前の箸づかひも中学校2年生で6割

を超え、中学校3年生で63%である。学年が進行とともに伝統型への移行が認められるものの、中学校段階で伝統型は生徒の5人に1人であり、8割の生徒は正しい箸づかいができていない。

以上のように、5歳児から中学校3年生までの箸づかいは年齢とともに伝統型への移行は認められるものの、中学生段階においても伝統型は5人に1人であり、箸づかいに関する教育が必要であるといえる。



## 2 家族構成と箸づかい

小学校調査では、鳥取市近郊の中小規模学校であるB校・C校・D校・E校の4校と鳥取市内の大規模校であるF校の間には、以下の表5にみるような差がみられた。伝統型の割合に

表5 学校別小学生調査

内 容	B小学校 (n=75)	C小学校 (n=92)	D小学校 (n=182)	E小学校 (n=292)	F小学校 (n=170)	計 (n=812)
分類①	15%	16%	11%	10%	7%	10%
分類②	32%	48%	43%	44%	34%	41%
分類③	49%	35%	44%	40%	56%	45%
不明	4%	1%	2%	6%	3%	4%

ついてみると、B校・C校・D校・E校4校は何れも10%を超えているのに対し、F校は7%であり、分類③が56%と他校に比べ多い。

この要因のひとつとして、家族構成の違いが考えられる。鳥取県は全国平均よりも核家族が少なく、拡大家族の割合が多い地域である。とりわけ、郡部はその傾向が強く、B校・C校・D校・E校の4校は拡大家族の多い地域に位置する小学校である。これに対し、鳥取市内のF校は県内では比較的核家族の多い地域である。

本調査では対象者の家族構成を調査していないので、推測の域を出ないが、おそらく家族数や家族構成が子どもの箸づかいの習得に影響を及ぼしていると思われる。

表6 学校別中学生調査

内容	G中学校 (n=248)	H中学校 (n=151)	計 (n=393)
分類①	19%	21%	20%
分類②	62%	59%	60%
分類③	17%	19%	18%
不明	2%	1%	2%

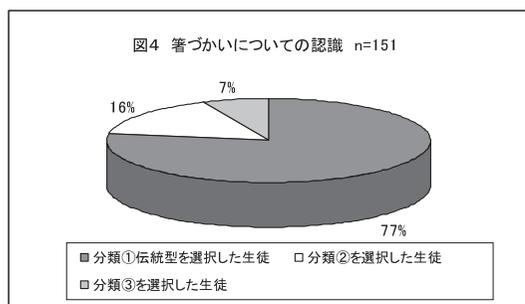
中学校調査では、表6にみるように、鳥取市近郊にある中規模校G中学校と鳥取市内にある小規模校H中学校には、差はほとんどみられなかった。これは、H中学校は鳥取市内ではあるが、拡大家族の割合の多い地区であり、近郊にあるG中学校と家族構成がほぼ一致していることが要因であるように思われる。

## IV 中学校における箸づかひの支援プログラム開発実験とその効果

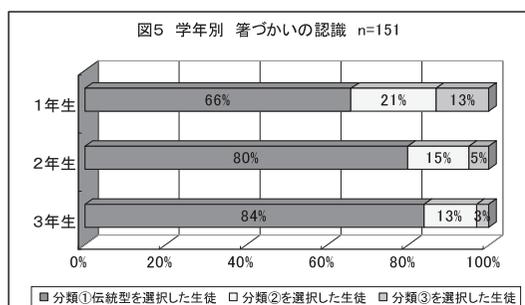
### 1 箸づかひに関するアンケート調査結果

#### (1) 箸づかひについての認識

実態調査から、中学生段階においても伝統型に移行している生徒は2割であり、8割の生徒



が伝統型に移行できていない点が明らかになった。この結果を踏まえ、中学校段階で伝統型に移行させる支援プログラムを開発するために、ここでは、鳥取県東部のH中学校(151名)を対象として箸づかひについてのアンケート調査を実施する。



伝統型の箸づかひに対する認知を明らかにするため、「正しい箸の持ち方はどれだと思いますか」と尋ねた。ここでは、7例の箸づかひ(分類①伝統型1例、分類②1例、分類③5例)を図示し、その中から伝統型(正しい箸づかひ)を選択させた。図4にその結果を示す。

全体の77%の生徒は伝統型の箸づかひを理解していた。しかし、16%の生徒は分類②を、7%の生徒は分類③を選択するなど23%の生徒の認識に誤りがみられた。

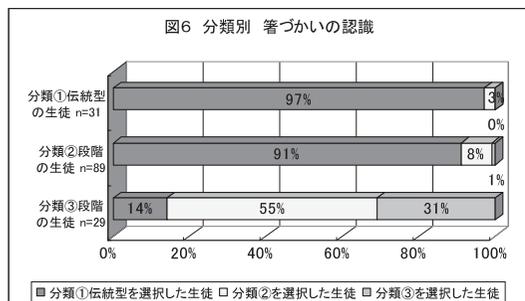


図5は学年別に箸づかひの認知をみたものである。学年進行とともに正解は増加し、3年生では84%の生徒が伝統型を理解している。

図6は実態調査のデータをもとに、分類①伝統型の箸づかひの生徒、分類②段階の生徒、分類③段階の生徒が、伝統型の箸づ

かいを理解しているかをみたものである。図6から、正しい箸づかいを理解しているものは、伝統型や分類②段階の生徒に多く、分類③の生徒は僅かである。分類③段階の生徒は箸づかいの認知に問題があり、この段階の生徒には、まず、正しい箸づかいを理解させることが必要であるといえる。

(2) 箸づかについての自己認識

次に、自分の箸づかについての認識を明かにするため、先の質問で使用した7例の箸づか(分類①伝統型1例,分類②1例,分類③5例)の図から「あなたの箸の持ち方はどれに一番近いですか」と尋ねた。その結果が表7である。ここでは実態調査結果との比較を行った。

表7 箸づかいの自己認識と実態調査結果 n=151

内 容	自己認識	実態調査
分類①	54%	21%
分類②	39%	59%
分類③	7%	19%
不明	0%	1%

アンケート調査では54%の生徒が自分の箸づかいを正しいと認識しているが、実態調査では21%である。自分が分類②段階であると認識している生徒は39%であるが、実態調査では59%、自分が分類③段階であると認識している生徒は7%に対し、実態は19%であった。ここから、多くの生徒が自分の箸づかいを正しく認識できていない実態が明らかとなった。箸づかいの指導では、正しい箸づかいを理解させるとともに自己の箸づかいを正確に認識させる必要があるといえる。

(3) 家庭における箸づかいの教育

表8 家庭における箸づかいの教育

内 容	全体 n=151	分類① n=31	分類② n=89	分類③ n=29
教わった	23%	61%	17%	0%
教わっていない	23%	0%	26%	38%
覚えていない	54%	39%	57%	62%

家庭で伝統型の正しい箸づかいを教わったことがあるか、どうかを尋ねた。回答は「教わった」、「教わっていない」、「覚えていない」から選択させた。

表8に結果を示した。表8から、家庭で伝統型の箸づかいを教

わった記憶のある生徒は、全体では23%に留まることが明らかとなった。

但し、伝統型に到達している分類①の生徒では61%が家庭で箸づかいを教わったと答えているのに対し、分類③段階の生徒では教わったと答えたものは皆無である。箸づかいの習得には家庭環境が大きく影響することがここから指摘できる。

表9 学校で正しい箸の持ち方を教わったことがありますか

内 容	全体 n=151	分類① n=31	分類② n=89	分類③ n=29
教わった	11%	19%	9%	10%
教わっていない	53%	23%	62%	59%
覚えていない	36%	58%	29%	31%

(4) 学校における箸づかいの教育

学校で正しい箸づかいを教わったことがあるかを尋ねた。回答は「教わった」、「教わっていない」、「覚えていない」から選択させ、表9に結果を示した。

「教わった」と回答した生徒は全体で

は 11%であるが、分類①段階の生徒では 19%である。分類②と分類③では 1 割程度であり、認識に 2 倍の開きがみられる。

同様に、「教わっていない」は、分類①の生徒では 2 割ほどであるのに対し、分類②と分類③では 6 割の生徒が「教わっていない」と回答している。こうした同一の学校における生徒の認識の差の要因として、箸づかいに対する生徒の価値観の差を指摘することができる。

表 10 は「箸を正しく使えることが自分のためになると思いますか」と尋ねたものである。

分類①の生徒は「非常に思う・少し思う」の割合が際立って高く、分類②や

分類③に比べ、正しい箸づかいが重要であると認識している。つまり、学校での箸づかいの教育についての認識の差は、生徒の箸づかいに対する価値観の差から生じている可能性が高い。換言すれば、学校では、正しい箸づかいの価値を生徒に認識させる過程が不可欠であるといえる。

生徒の箸づかいの実態からみれば、学校での箸づかいに関する教育は十分ではなく、今後、箸づかいの教育を進める必要があるといえよう。

## 2 支援プログラム開発のための実験

### (1) 実験結果

対象者 18 名（各学年 6 名、計 18 名）は伝統型に移行しておらず、アンケート調査から箸づかいの習得について否定的な生徒である。18 人には伝統型の箸づかいを指導し、給食において最初の 3 分間伝統型で食事をとるよう指示した。実験期間は 2004 年 11 月 25 日から 12 月 24 日までの 30 日間である。以下には、実験前の 2004 年 11 月 24 日に撮影した写真①と実験終了後の 2004 年 12 月 24 日撮影の写真②を示し、実験の結果どのように変容したかを述べたい。但し、紙面の制約上、分類①と分類②の事例を各学年 1 例ずつ計 6 事例について報告する。

#### 事例 1 1 年生分類②の箸づかい

写真①



写真②



事例 1 は、中指の使い方が間違っており、伝統型で食べようとすると、つまむことはできるが、箸先を開くことができない。このため、中指の位置を確認しながら食べることを意識させた。実験後は、正しく持つこ

とができるようになり、食事もできるようになった。但し、まだ硬い食材の 때가困難である。

## 事例2 1年生分類③の箸づかい

写真①



写真②



事例2は、正しい箸づかいを理解しておらず、全く使えなかった。当初は真剣に行わず、進歩が見られなかった。途中、諦めてしまう場面も見られたが、学校給食中だけでなく、家庭でも実施したため、最後は歪な形ではなくなった。徐々に正しい箸づかいに近づいており、伝統型に移行できるよう練習を続けていく意志が確認された。

事例2は、正しい箸づかいを理解しておらず、全く使えなかった。当初は真剣に行わず、進歩が見られなかった。途中、諦めてしまう場面も見られたが、学校給食中だけでなく、家庭でも実施したため、最後は歪な

## 事例3 2年生分類②の箸づかい

写真①



写真②



事例3は中指が下の箸を支えている持ち方で、上の箸を開くことができないが、食事を行うのに不自由はしていない。また、実験前の自分の箸づかいを正しい箸づかいであると誤認していた。伝統型を練習すると早い段階で移行でき、箸先も大きく開くようになったことから、伝統型の使いやすさに気が付いたようである。

事例3は中指が下の箸を支えている持ち方で、上の箸を開くことができないが、食事を行うのに不自由はしていない。また、実験前の自分の箸づかいを正しい箸づかいであると誤認していた。伝統型を練習すると

## 事例4 2年生分類③の箸づかい

写真①



写真②



事例4は箸を包むように持つ持ち方である。箸を開くことが困難で、刺す行為で食事を行うことが多い。そのため、食べ残しが多く、食べた後も散らかっている。伝統型に移行するため懸命に練習を行ったが、1ヶ月後も移行できなかった。伝統型の箸づかいはできるが、食事では実験前の持ち方になってしまう。本人は「正しい箸の使い方ができれば、綺麗に食べられるのに」と述べるなど自分の箸づかいを悔やんでおり、練習を継続している。

事例4は箸を包むように持つ持ち方である。箸を開くことが困難で、刺す行為で食事を行うことが多い。そのため、食べ残しが多く、食べた後も散らかっている。伝統型に移行するため懸命に練習を行ったが、

## 事例 5 3 年生分類②の箸づかい

写真①



写真②



事例 5 は実験対象者の中で伝統型に最も近い持ち方であったが、箸を囲むように持っていた。囲むように持つ事を修正するよう意識して練習に取り組んだ。つまむことはできたが、切ることができないため、大きい

食材では両手で箸を 1 本ずつ持ち、ナイフとフォークのように使っていた。

懸命に練習に取り組むことができず、途中はほとんど行っていなかったため、実験後に成果は現れなかった。

## 事例 6 3 年生分類③の箸づかい

写真①



写真②



事例 6 は様々な箸の持ち方で食事を行っており、正しい箸づかいを理解していなかった。伝統型の箸づかいを学び、指の位置の確認や箸先の開き方・閉じ方などの習得について懸命に取り組んだ。長時間、伝統型

で食事をすることは困難であったが、伝統型に抵抗はなくなった。実験後は、伝統型で食していたが、力の入れ方が難しく、箸の中央部あたりから箸先にかけての位置で持つ持ち方になっている。箸頭に近い位置で持つことができれば、箸先は開き、どのような食事にも対応ができる。このため、箸頭のあたりを持つよう練習している。

実験対象者 18 名のうち事例 3 のように伝統型に移行できた生徒は 9 名である。このうち長時間、完全に伝統型が行えるようになったものは 8 名である。残り 1 名は長時間行えず、実験終了後も練習を継続している。伝統型に移行できなかった対象者は 8 名であった。このうち事例 2 のように伝統型に近づいたものは 4 名である。ここから、実験対象者の 8 割が伝統型に移行しつつあることがわかった。

学年別でみると、1 年生 2 名、2 年生 4 名、3 年生 3 名が伝統型に移行している。1 年生がやや少ないものの学年による著しい差はみられなかった。

実験前の箸づかい別でみると、分類② 9 名中 2 名が、分類③ 9 名中 7 名が伝統型に移行している。このことから、伝統型に近い持ち方で食事をしていると修正が難しく、逆に、全く異なる持ち方で食事を行っている方が修正し易いといえよう。これは、伝統型に近い対象者は、食事をするのに不都合を感じず、見た目も近いため、周りの人に気を使わなくても食事を行うことができ、伝統型の利点や美しさを体得でき難いためであると考えられる。逆に、全く異なる持ち方の対象者は、見た目からも周りの人に誤った箸づかいであることが分かることや食事をと

るのに不都合が生じやすいため、伝統型を体得すると、その利点や美しさを認識するためであると考えられる。伝統型に近い人は移行できないのではなく、そのためには根気強く修正していく必要があるのである。

以上のように、本実験では、学校給食の最初の3分間の練習により、30日間という短期間に半数程度の生徒が伝統型に移行可能であることが明らかになった。また、伝統型とは全く異なる箸づかいの場合の方が修正し易いことも判明した。

## (2) 事後アンケート結果

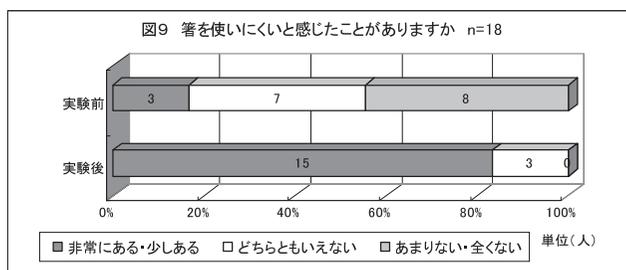
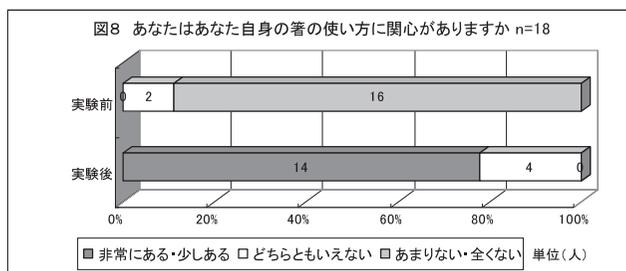
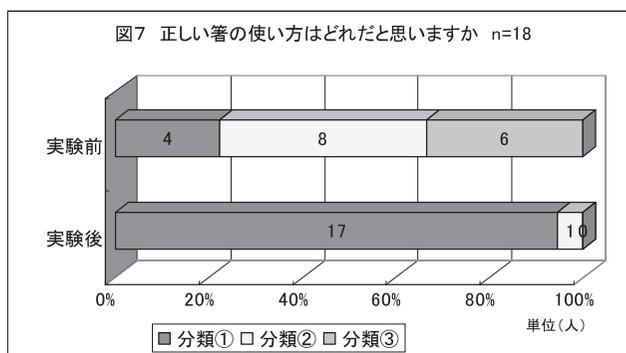
実験後、事前アンケート調査と同じ内容の事後アンケート調査を行った。結果は以下のとおりである。

図7から、伝統型の箸づかいを正しく理解していた生徒は、実験前は4名であるが、実験後は17名に増加したことが明らかになった。1名は分類②と誤認したが、分類③を選んだものはいなかった。このように、実験後は、ほとんどの生徒が正しい箸づかいを理解していた。

図8は、自分自身の箸づかいについて、関心の有無を尋ねたものである。実験前には関心が「非常にある・少しある」は皆無であり、16名が「あまりない・全くない」であった。これに対し、実験後は関心が「非常にある・少しある」が14名に増加するなど、自分の箸づかいへの関心が高まっていることが確認された。

図9は、箸を使い難いと感じたことがあるかを尋ねたものである。実験前では「非常にある少しある」は3名と少数であったが、実験後は15名と大幅に増加している。

図10は箸づかいを直したいと思うか否かを尋ねたものである。実験前では「非常に思う・少し思う」は3名であったが、実験後は9名に増加し、「あまり思わない・全く思わない」は12名から1名に激減した。



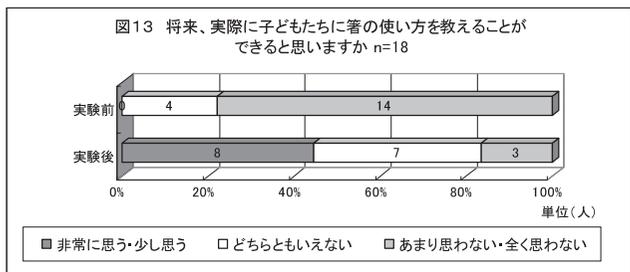
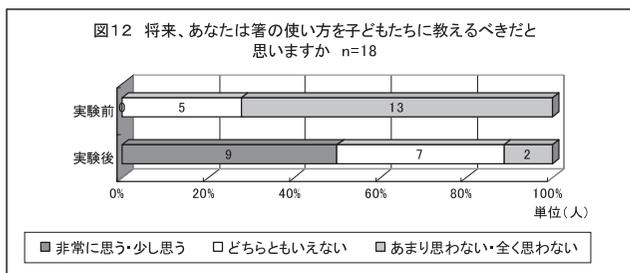
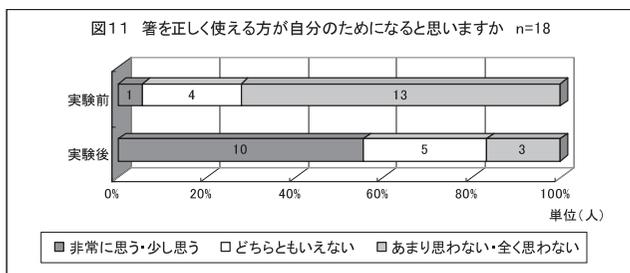
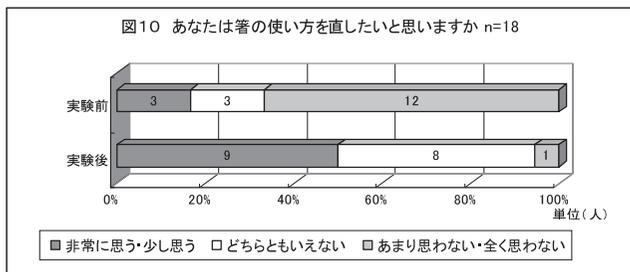


図11は箸づかいに対する価値観を尋ねたものである。箸を正しく使える方が自分のためになると「非常に思う・少し思う」は実験前後で1名から10名に激増しており、箸づかいに対する価値観が大きく変化したことが確認された。

図12は箸づかいの伝承について尋ねたものである。「将来、箸づかいを子どもに教えるべきだ」について「非常に思う・少し思う」は、実験前後で0人から9人に激増しており、ここからも価値観の変化を読み取ることができる。

図13は自分に箸づかいの伝承が可能か否かを尋ねたものである。「将来、実際に子どもたちに箸づかいを教えることができる」について「非常に思う・少し思う」は、実験前後で、0人から6人に増加している。伝統型の箸づかいを習得することによって、生徒の中に子どもたちに教える自信が生まれたものと推察される。

## V おわりに

本調査の結果および実験の結果、中学生段階においても伝統型の箸づかいは5人に1人であったが、学校における適切な教育支援により短期間で伝統型に移行することが明らかになった。今回、用いた教育支援は事前に伝統型の箸づかいについて学習し、30日間、給食の最初の3分間を練習に充てるといったものであった。

ここから、家庭科の時間や総合的な学習の時間に、箸づかいに関する事前学習を1時間程度

行い、給食で30日間程度練習し、その成果を事後学習で確認する支援プログラムが有効であると考えられる。事前学習の際には、伝統型の箸づかいを理解させるとともに、その価値についても考えさせることが重要である。正しい箸づかいを習得することは、自分の生活に役立つだけでなく食文化の継承の観点から重要であることを理解させたい。

実際の練習の場面では、自分の箸づかいと伝統型との違いを明確にした上で、その点を修正するよう意識させることが重要である。また、伝統型になる直前の持ち方の生徒には練習を継続させるために助言や励ましが必要である。今後は、これらの点を踏まえた支援プログラムを作成し実施していく予定である。

- 
- <sup>1</sup> 初倉巻和子・村田輝子・大場幸夫他、1992年、幼児の食行動と養育条件に関する研究 第1報 幼児の食行動の分析、小児保健研究、51巻6号、pp.721-727. 山田知道・荒川巳恵子、1987年、幼児の食生活(第二報) 幼児期の家庭における箸使い、金城学院大学論文集13巻、pp.97-109. 富岡孝・桜井昌子・岩崎律子、1986年、箸さばきと摂食行動との関連性について、聖徳栄養短期大学紀要17巻、pp.45-53. 谷田貝公昭、1985年、箸の持ち方・使い方の実態に関する調査報告、家庭教育研究所紀要6巻、pp.25-32 など.
  - <sup>2</sup> 酒井治子、2001年、二本の棒、「箸」づかいかから学ぶ食、江原絢子、食のフォーラム19 食と教育、ドメス出版、pp.48-51.
  - <sup>3</sup> 足立己幸、1984年、なぜひとりで食べるの、日本放送出版協会、足立己幸、2000年、知っていますか 子どもたちの食卓、日本放送出版協会.
  - <sup>4</sup> 酒井治子、2001年、二本の棒、「箸」づかいかから学ぶ食、江原絢子、食のフォーラム19 食と教育、ドメス出版、pp.48-51.

